

当り狂言（その二、世話物）

一一、恋飛脚大和往来

河竹繁俊

〈出典：「中村吉右衛門」富山房、昭和30年9月〉

近松の「冥途の飛脚」を改訂したもの、この「恋飛脚」である。

原作との相違は、親友としてえがかれた八右衛門が、敵役になっていることと、類型的な情話劇になったことが、その大きな点であるが、新口村の孫右衛門というような近松の思想の、ある意味における代弁者が生きていて、吉右衛門もそれを勤めて好評であった。本人も「情味があって、気持がいい役だと思ひます。」と語っている。

役柄からいっても少々無理なのだが、仕勝手は悪くないし、また年とってから、若返りにも役立つという忠兵衛の方は、先代鴈治郎が得意としたことは有名であり、すべて代表となっていたので、吉右衛門のも、鴈治郎の型に少しくふうを加えた程度のものであった。

そのところを『自伝』に見ると、

最初の梅川との忍び逢ひを、鴈治郎は茶室風の離れ座敷で致しますが、私は普通の塀外でやりますし、封印切の場も、近頃の大坂風ですと舞台真中辺の奥に大階段をつけて、この階段で芝居をしますが、私は定式通りに中二階めいた上手の障子屋体でやります。この方が見た目もよく芝居も落ち着きますし、前の欄間で二階三階のお客様方に上半身見えないと云つた様な事もなくて宜しいかと存じます。昔の人が苦心して工夫した大道具は何と云つてもよく出来て居ますから、我々は余り手を入れない方が、宜しいのではないでせうか。

この芝居の眼目は、申す迄もなく封印切でございますが、封印は自分で切るのが当然ですけれど、近頃は盛んに叩いたり、火箸でつついたりして居る中に封が少し破れるので、やけになつて一思ひに切ると云ふ行き方をする人が多い様で、近松の原作とちがつて、この大和往来の方は、さう云ふジャラけた行き方をしてもいゝ様な所もあると思ひますから、私はさうした味はひの面白味も、それとなく参酌致して演じて居ります。

眼目の「封印切」が、以上のような演出でなされるので「封印ぎれ」とさえいわれるのであるが、その前に、「封印切」の前奏曲ともいふべき「羽織落し」の演出がなされる。

三百両の金をふところに入れて、お屋敷に届けるために家を出たのであるが、いつの間にか道は、梅川のいる方へ歩いていて、ハッと気がついて、道をもどるがまた、梅川の方へ向う、一度は思案、二度は不思案、三度飛脚、戻れば合はせて六道の、冥途の飛脚と」床のあいだ花道で行きつもどりつ、いつか羽織の落ちたのも知らないのである。

この羽織落しと、封印切りと、後に梅川と忠兵衛の道行となつて、相合かごで行くところに忠兵衛の性格がよく現わされている。

相手の梅川には、初演が美雀、二度目は病気のため初日だけだったが時蔵、戦後は、今の歌右衛門であった。

「新口村」の孫右衛門は、忠兵衛よりも吉右衛門には本役であった。多少の過剰はあったが情味津々たるものがあった。

新橋演舞場の中村会で上演されたとき、利倉幸一は、忠兵衛についてその劇評の中で次のようにいっている。

「吉右衛門の忠兵衛はさすがに再演の自信が肯かれる好技だ。色気こそ薄い、じやらじやらしているだけで忠兵衛を描いて、しかも封印切のプロセスにも無理がないといふ、段取りのもつともさだけでなく、あの場合の感情の動きかたをほんとうに見せてゐる。

そのくせ吉右衛門としては不得手でありそうな、堀外の場の意外に面白いのは、歌六から伝承したその芝居上手の為だ。」